DOUBLE　KID

佐倉千香子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＤＯＵＢＬＥ　ＫＩＤ

【Ｎコード】
Ｎ３７８６Ｄ

【作者名】
佐倉千香子

【あらすじ】
快斗と新一は友人同士。快斗がキッドということも知っている新一は、キッドの手伝いを頼まれた。しかしトラブルにより、キッドの姿で新一は警察に捕まってしまった。

プロローグ（前書き）

コナンから新一に戻ったという設定です。

プロローグ

この街の夜は闇に隠れることが無い
騒音とネオンに照らされたまま夜明けを迎える
そして、うっすらと明るくなる頃・・・
やっと街に静寂がやってくる

皆が活動を始めるまでの、ホンの短い時間だけが、
この街の唯一の休憩時間

ビル街にある小さな公園、朝もやがかかり、鳥のさえずりが心地よく耳に響く・・・
だが、今日はそのいつもの光景を感じることはできなかった

あるビルの一角で起きた事件のために数百人もの人間が借り出され
静かなオフィス街はライトで照らされ
パトカーが走りまわっている
ヘリコプターが飛んでいないのは、霧のせいだろうか

時折遠くから聞こえてくるサイレンの音
バタバタと走り回るのは、制服と私服が入り混じる目つきの悪い男たち
その中で警部と呼ばれる男が、携帯と無線を手にし指揮をとっていた
時間が経つにつれ表情が険しくなっていく警部
視線の先には、霧に見え隠れするように飛び廻る白い影

ただ一人のためにいくつもの紅く回転する灯が街を走り回っていた
けっして届くことの無いその影を追って・・・

薄い霧が映画のスクリーンのように
この場の出来事を全て映し出している
観客は誰もいない

主演は
真っ白な衣装とマントを纏い、
シルクハットとモノクルを身につけ、
華麗な姿と気障な台詞
優雅な身のこなしで人を魅了してやまない世紀の大怪盗

怪盗キッド・・・

第1話　早朝の公園で

「わりーな、中森警部。」

ビル街にある小さな公園の中。
誰もいない公園で早朝からこんな言葉をつぶやくのは、
黒羽快斗。高校2年生。そして、怪盗キッドの正体…

怪盗としての一仕事を終えて、素早くキッドの衣装を解き、なんと素顔をさらしての登場。
すぐ近くまで警官たちが迫っている、普通なら職務質問が掛けられてもおかしくないこの状況下。
しかし、快斗は無関係を装う表情で落ち着き払っていた。

それもそのはず、快斗自身、中森警部の娘とは幼なじみ。
その為、顔なじみの警官も数多い。
さらに、隣には『日本警察の救世主』とまで言われている人物が立っていた。

工藤新一。高校2年生。そして、探偵…

快斗と新一が一緒にいるという状況で、誰が『快斗　イコール　キッド』と考えるだろうか。
と、いうわけでまず疑われることが無い、とっても安全な環境にいる快斗。

しかし困ったことも…。

「工藤新一さんじゃないですか。こんな朝早くからどうしたんですか？」

「一課でも事件ですか？」

など、次々に声をかけてくる若い警官達。

どう考えても高校生の新一より年上なのだが、なぜか敬語。

さすが救世主である。

新一の答え方も

「散歩ですよ。皆さんは事件ですか？またキッドが現れました？」

と、上から目線。

「たまには二課にも来て下さいよ。キッドを追えるのは工藤くんだけですから。」

中には、助言を求める刑事もいるが、今の新一は怪盗キッドの正体を知っているので、

一切キッドの現場には出向いていない。

「今日は友人が一緒なので…。それに中森警部に怒られてしまいますから。」

新一らしくやんわりと断る。

そうこうしているうちに、一人、また一人と近寄ってくる警察官。

なんとか、振りはらいたいところだが、なかなかできない新一の性格。

快斗はポーカーフェイスで笑顔を見せながらも、内心では「早く帰れ。」と考えていた。

そしてまた一人、いつも中森警部と一緒にいる刑事がやってきた。

「やぁ、工藤君じゃないか。時計台の時も君が協力してくれたおかげでキッド確保までもう少しだったよ。ホント惜しかったよね〜。それより聞いた？昨夜またキッドが出たんですよ〜。」

「えぇ、今少し聞いただけで、詳しくは…」

新一は適当にあしらっておこうと軽く返そうとしたが、それを遮るように刑事が話を続けた。

「そーなんだよ。すごく大変だったんだよね。まぁ今もまだまだ終わってないけど。警部は逃げられて不機嫌だし、盗まれた宝石は見つかったんだけど、持ち主がさぁ…。またうるさいのよ、これが。『盗まれたんだから保険はおりるんだろうな？傷でもついて価値が下がっていたらどう責任とるんだ！警察のせいだ！』って、すごい剣幕で言ってくるし、僕たちは保険屋じゃないって、ねぇ？」

「はぁ…そうですね。」

快斗は刑事が新一に向かって熱く語っている間、ストレスが沸いてくるのを押さえながら思っていた。

俺が大事な宝石に傷付けるヘマなんかすっかよ！って言ってやりたい、と思いながら。

快斗は表情と全く違うことを考えながら、にっこりと笑顔で刑事に言った。

「キッドを追ってるんでしょ？ここにいる俺らも怪しくないすか？

キッドは変装の名人なんですから。」

「…まっさかぁ！
あれっ？工藤君の友達って、警部のご近所の…？」

今まで隣にいたのにねこの刑事は快斗だということに気付いていなかったらしい。

「ば、ば、…えーと、ばかい…。」

青子がよく言う間違った呼び方をいいそうになったので、快斗は、

「黒羽・快斗。…ですよ。」

不自然なくらい、名字と名前をしっかりと区切って快斗は名乗った。顔はちゃんと笑顔のまま。

「あーそうそう、快斗君！そーだったね、アハハっ。
そろそろ現場に戻らなくては。じゃ、またっ！」

刑事は軽快な笑い声を残し、警官達を引き連れて戻っていった。

快斗がポーカーフェイスを崩したのはその後すぐ。

「あいつには絶対キッドを捕まえらんないね。」

そして、新一は、ふぅ～…と、大きなため息をつき、

「お前なぁ…、あぶねーじゃねーか。あの刑事がキレ者だったらどーすんだよ。
んなことばっか言ってっと、そのうちバレるぞ。」

実際、新一の心情も穏やかではない。
怪盗キッドを匿うわけにはいかないと思いつつも、友人として快斗の事情も知っている。
誰も傷つけない、盗んだものは必ず返す。

など、いくつかの約束を快斗、いやキッドが守っている間はこのままでいよう。
新一はいつのころからかそう考えていた。
それに、敵は同じ組織。

そう、元々戦う相手は、組織のはず。
なのに警察とのやりとりが最近はメインに。しかも快斗のやんちゃな性格がそれを楽しんでいるふしがある。
快斗いわく、「組織を追うために、キッドは目立たないとなんねーんだ。」だそうだ。

とまぁいろいろあって、少々怒りモードの新一を、まぁまぁ…となだめる快斗。
そして、憎めない笑顔で新一の耳元に近づき、ゆっくりとした口調で言った。

「今夜の仕事だけど…手伝って？」

第2話　ビルの屋上で（前書き）

ここからは新一目線の第一人称になっています。前回までは三人称でしたので戸惑うかもしれませんがいろいろ理由がありまして…ご容赦ください。どうしても新一が主役の部分であるというところにこだわりたかったのです。

第2話　ビルの屋上で

「あいかわらず、高っけートコが好きだよなー。」

杯戸シティビル・屋上
眼下には数十台の警察車両と数百人の警察関係者。
そして、正面にはヘリが３機。

オレは、深いため息をついてその場にしゃがみこんだ。

そこは、屋上の端の端。一歩先は空間となる、本当の端っこである。
普通、一般人がここに立ち入ることは無い。
ゆえに、今のオレは一般人では無く、かと言って探偵として事件現場にいるワケでも無い。

オレが身のすくむ思いをして、結構ドキドキしながらここに立っているってことを
アイツはわかっているんだろうか？
おまけにこの格好。
真っ白なスーツ、足元まである長いマント。
シルクハットとモノクルまで付けられて、不慣れなものだから動きも鈍い。

マントが強風に煽られてバランスが崩れそうになると、さすがにオレも怖かったりする。
「オレはキッドと違ってこんなところに立つのは慣れてないんだっ。」

「新一っ！　しゃがんでちゃダメだろ！

今日の仕事が成功するかどうかは新一にかかっているんだからね！
第一、キッドがそんな疲れたオッサンのようなカッコするわけ無いだろ。」
耳に仕込んだ超小型のスピーカーから、快斗の怒鳴り声が流れてきた。
どこかで見ているんなら、ヘタな行動は取れない。
オレは立ち上がり、辺りを見回した。しかし、快斗が近くにいる気配は無い。

探偵なのに、キッドの計画を止めるどころか、こんなカッコでキッドの仕事に首突っ込んだ、なんて…。
いまさらやめるわけにもいかねーし、くっそぉ〜、こうなったらやってやる！

ひらきなおりも手伝って、快斗に指定された屋上の淵に立った。
もちろん、カッコつけて、優雅な笑みを讃えて。
やってみると、意外にいいかも、と思ってしまう自分は快斗と同じ人種なんだとよくわかった。

じはらくして、ビルの陰からヘリが近づいてきた。
一瞬、強く風に煽られ体勢が崩れたが、すぐに立て直す。
一応は快斗と同じ装備を用意しているが、もしハンググライダーを使ったとしても快斗のように使いこなす自信はない。
それこそ、人形と同じ目晦ましでしかないと警部にはすぐバレるだろう。
そう、オレは警部たちを惹きつける囮役だ。
だから完璧に演じる必要がある。しかもバレたら工藤新一は一巻の終わり。

それにしても、このへリ…。こんなビルギリギリのとこで空中停止。
オレが飛べないようにだろうな。
下からは、中森警部と他警官の声が聞こえてきた。
もうすぐ屋上に乗り込んでくるころか。
ま、そうなったらアイツらに紛れてしまえばいい。
そして一瞬でキッドの衣装を解いて新一に戻る。工藤新一が事件現場にいても違和感は無い。

非常階段を駆け上る、ガンガンとしたけたたましい音が大きく響き、
「キッドっ！」
中森警部が、やっぱり一番乗り。
後から他の警官もぞろぞろやってきた。ざっと100人は下らない。

そのとき、警部が言ったのは、
「キッドに近寄るんじゃないぞ。そのままだ。次の指示を待て。操縦士はその位置をキープ、キッドを飛ばすんじゃないぞ。」

うーん、今日の警部は賢いね。
いつもなら、キッドを見たら一番最初に飛び掛ってくるのに今日は冷静だ。
近寄ってこなかったら紛れ込めない。
そういや警部が言ってた。
次の指示？　警部が出すのか？　それとも他の誰かが…？

今朝、快斗が言っていたのは、
最近、警部が囮人形にひっかからなくなってきた。だから一度だけ囮になってほしいと。
そりゃ、何度も使えば誰だってわかるだろーよ。
それに、警察がキッドに割く人員も倍以上に増えてる。
囮を何体使おうが、肝心のジュエルの警備が薄くなることは無い。

でも、囮がキッド、つまりオレだったら…。
間違いなく警部はオレのほうにくる。
そうなると、量だけがとりえのほかの警官達は快斗にとって何の障害にもならない…ともアイツは言ってた。
うーん、日本警察なさけない。
ん？
てことは、意外と中森警部のことは認めてるってことか？
それとも誰かが助言している？
いや、オレの助言をことごとく無視する警部がそれは無いだろ。

とにかくこの場をなんとかしたいが、
本物のキッドの癖を熟知しているわけではないので、ヘタに動いたら偽者だはすぐわかってしまう。

「快斗…どうする？」
オレは小声でつぶやいた。
少しの沈黙の後、快斗の声が聞こえてきた。

「んー、しょうがないから…捕まっちゃって。
大丈夫！　ちゃんと考えてるから。」
えっ？
「おいっ！　なんだそれ？　オーイ！　…快斗？」

あのやろー、交信切ってやがる…

第３話　ビルの屋上で２

さーて、どうするか？

オレは、受信機の周波数を警察無線に切り替えて逃げるチャンスを待つ。
ん…？
快斗の奴、捕まれって言ってたな。

快斗がそうしろと言うのならそれが一番だろうけど
…かなり不安だ。
変更した快斗の計画が何なのかも知らない。
もっと、聞いとけばよかったが後の祭り。

それならオレは、キッドを演じてみせるだけだ。
オレのバックには満月。
明るさを増した月に照らされるのは少々参るが、
逆光だからオレはシルエットとしてしか映らないはず。
これだけ遠巻きなら大丈夫だろう。

あとは、どれだけオレがキッドに為りきれるか。
演技をするのは嫌いじゃない。
キッドのように機械無しで声色を変えることはできないが、
口調・間のとり方を真似るのは得意だ。
今回、変声器は使えないが快斗と俺の声は元々似ているので問題無い。
オレはただ、小憎たらしいキッドの口調を真似ればいいだけ。
そして、キッドの気品と優雅さを損なわないようにしとかなきゃな。

また文句言われちまう。

さてと…。

念のため、右手をポケットに入れ快斗が使う物よりも小型のトランプ銃を握りしめる。
オレの装備はそれだけ。
初めは快斗のようにあちこちに道具を忍ばせていたが動きが取れない上に、
マジックの道具なんて持ってても使いこなせない。

まぁ、ここはおとなしく捕まる予定。
抵抗する気もさらさら無い。
あくまでも、念のため。

そして、警部に視線を向けるオレ。
もちろん、相手もオレから目を離さない。
他の刑事はそのままで、警部だけが少しずつ近寄ってきた。

オレはキッドと同じ不敵な笑みを浮かべ、警部を待つ。

探偵のオレが警察を相手にするのは不本意のはず。
なのに、快斗がオレを使って、警察をどう出し抜くのか…。
そう考えるとワクワクしてる自分もいる。

快斗が言っていた台詞の意味…今ならわかるような気がする。
『怪盗は鮮やかに獲物を盗み出す芸術家』
お前は確かにアーティストだよ。

第4話　ビルの屋上で3

快斗はキッドとして一人で組織と戦っていた。
今では仲間もいるらしいけど。

キッドの正体を知らなかったころは、キッドの行動を理解するなんてできなかったけど、
今は違う。

共通の敵に、キッドになったワケ。いろいろ聞いた。
まだまだ隠してることがありそうだが、こっちも同じ。
必要になったら互いに話すさ。
オレは快斗に理解を示したいし、協力してやりたい。

早く宝石が見つかってくれれば快斗の苦労は報われる。
あいつは宝石を粉々に砕きたいと言っていた。

でもオレはそれを組織壊滅に利用したいと思っている。
なんらかのカギを握っているに違いないのだから。

快斗のしたいようにすればいいと考えるオレと、利用したいと考えるオレ。

とにかく、
この先のことはビックジュエルが見つかってから考えよう。

とりあえず、今夜の計画を成功させてやんなきゃな。

――さぁて、どーすっかな…。

こっちからいくか。

オレは、警部がある程度近づいたのを見計らい、声を掛けた。

「これはこれは、中森警部。お待ちしておりましたよ。

予告時間まであと1時間。

相変わらずソツの無い完璧な警備体制。さすがとしかいいようが無い。」

「それは、嫌味にしか聞こえんな。」

いつにも増して自信ありげな警部の表情。

「キッド、お前だったらここを突破するのは簡単だろう？」

「お言葉ですか、警部。私もただの人。

これだけの警備を見せられたらもう少しご一緒したいくらいですね。」

これはオレの本心。お世辞も嫌味も言ったつもりは無い。

警部がいつもと違うのはよくわかった。

なんとなく警部に余裕も感じられる。

誰かが助言しているんだろうか？

「キッド、今日はいつもと違う。お前が何を仕掛けてこようとも全て阻止してみせる。

どうする？」

オレは、少しシルクハットを下げて顔を隠し、さらに銃からも手を離すと、

両手を挙げて少し肩をすくめた。

「中森警部に敬意を表し、今日はおとなしく動向させて頂きますよ。」

そのとき、俺の体めがけて何かが飛んできて弾けた。

同時にガスのようなものが噴射され周囲に撒き散らされた。

――催涙ガス？

いや、ダメだ…。意識が遠のく…。

やべーな、正体がバレちまう…。

警部がこんな手を使うなんて信じられなかった。

気力を振り絞って、かすかに残った意識を集中させるが警部の声がすごく遠く感じてきた。

「誰だ！　許可無くこんなものを使ったのは。」

最後に聞こえてきたのは警部のこの台詞。

そして、オレはもう自力で何もできないと判断する。

ただ一つだけは理解できた。

警部からもこの状況は予定外だということ。

結局オレは何の考えもまとめられないまま意識を失った。

警察官の集団の中で…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能(たんのう)してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3786d/

DOUBLE　KID

2010年10月28日08時41分発行